

第四版への序文

「二二世紀になったのだから、『二一世紀家族へ』じゃなくて『二一世紀家族だ』じゃないでしょうか。」本書を教科書として使ってくださいている方から冗談めかしたご意見をいただいたことが、五年ぶりの改訂を決意させてくれた。たしかにタイトルの問題もあるが、さらに日本社会の変容が大きかった。「学生たちは昔の話だと思つて読んでますよ。」本書を使つてくださっている別の方も教えてくれた。初版が出版された翌年、オウム事件と阪神淡路大震災が起きた。そのあたりを転換点に日本社会は大きく変わったと言う人は多い。平成も終わりを迎え、昭和の「家族の戦後体制」を論じた本書が歴史書と受けとめられるようになったとしても、それは当然かもしれない。

しかし、ここでひとつの問いが頭をもたげてきた。本書に書いたことは、本当に過去の話になったのだろうか。「家族の戦後体制」は終わったのだろうか。日本社会は変化したと言われるが、新しい時代が幕を開けたという確かな実感もない。このあいまいさをあいまいのまま放置するのではなく、社会科学の見かたを用いて可能な限りくつきりとその構造を描いてみることに、社会学者としての、そして本書の著者としての責任なのではないかと考えた。そこで新たに二章を書き下ろし、二一世紀の初頭の現実をいかにとらえ、今後の展望につなげることができるのかを論じることとした。

初版と新版の段階では、第10章を「個人を単位とする社会へ」と題したように、ヨーロッパや北米

の諸社会と基本的に同じ方向へ日本社会も向かっていると考えていた。しかし、第三版以降、日本の道がこれらの社会のたどった道から分岐していることが次第に明らかになってきた。二〇世紀の終わりから二一世紀初めの数十年が世界史の転換期であることは誰もが感じ取っているだろう。この変容する世界の中で、日本の位置もまた変化している。日本の人々や政府の自己認識も変化している。そこに思わぬ陥穽があることに、新たに追加した二章で向き合うこととなった。

本書はこれまでに英語、韓国語、中国語に翻訳され、思いがけず国外にも多くの読者を得ることができた。たいへん光栄なことであり、翻訳者と関係者の皆さまに深くお礼を申し上げたい。本書では、従来の社会科学の中心であったヨーロッパや北米地域の外に位置する社会を、正當に社会科学の対象とすることに心を砕いてきた。従来の学説の単純な応用ではすまない、しかし独自の文化を強調しすぎる自己オリエンタリズムの陥穽も避けなければならない。本書はおもに日本の家族に焦点を当てたものだが、問いの構造は他のアジア諸国や他の非欧米地域の社会にも共通する面があるだろう。特にアジア地域の方々に熱心に読んでいただけたのは、本書の問いに共感していただけたからではないかと想像している。

時代の課題を解くためには、方法論的ナシヨナリズムを超え、近隣地域の、そして世界の人たちと共に考える方法論的コスモポリタニズムをめざさなければならない。そのように考えて、この四半世紀、本書の改訂を重ねる傍ら、アジアの学術の共通基盤づくりに微力ながら努めてきた。その成果はアジアの家族と親密性についての各国の古典的研究を集めたリーディングスとして、またアジア家族

比較調査のデータベースとして、近日中にご覧いただける予定である。

なお、追加した二章はこの一〇年以上にわたって書き溜めてきた論考をもとにしている。紙数の制約もあつて舌足らずになつたのではないかと危惧するが、もとになつた論考も有斐閣から別に出版予定なので、必要に応じて参照していただけたらありがたい。

最後になつたが、本書を四半世紀にわたって刊行し続けてくださり、今回また改訂の機会を与えてくださった有斐閣と、思いがけず大仕事になつた改訂作業と一緒に楽しみながらサポートしてくださつた担当編集者の松井智恵子さん、非常に専門的な校閲をしてくださつた世良田律子さんに深くお礼を申し上げます。

二〇一九年九月

著者

もくじ

第四版への序文

i

第三版への序文

iv

新版発刊にあたって

xv

はじめに

xvii

プロローグ 二〇世紀家族からの出発

「戦後」へのカーテンコール

2

家族危機論をこえて

4

本書の構成

7

1 女は昔から主婦だったか

女はなぜ主婦なのか

12

世代別のM字型カーブ

14

戦後、女性は主婦化した

18

高度経済成長と主婦化

22

国際比較から見えてくるもの

24

2 家事と主婦の誕生

主婦とは何か

30

家事とは何か

32

市場と家事の誕生

34

ドイツの場合

36

3 二人っ子革命

家庭料理の創造 38 大正期の「おくさん」 40 主婦にあらざれば女にあらす 43

金属バット殺人の世代 48 出生率低下は二回あった 49 二人っ子革命 52 避妊よ
り中絶 55 耐久消費財としての子ども 57 子どもの誕生 59 母の誕生 61 愛
という名の管理 64 再生産平等主義 66

4 核家族化の真相

サザエさんの懐かしさ 74 家から核家族へ 75 大家族を夢見る核家族 79 人口学
的世代 81 戦後体制の人口学的特殊性 83 きょうだいネットワーク 86

5 家族の戦後体制

家族の戦後体制 94 近代家族の誕生 97 家族論の落とし穴 100 二〇世紀近代家族
103 日本の特殊性か 107

6 ウーマンリブと家族解体

ウーマンリブとは何だったのか 110 わたしにとつてのリブ 111 女に忠実になる 113
プライベートな問題などない 116 性と中絶 118 女性幻想の否定 121 家族解体 124
フェミニズムの二つの波 126 近代家族とフェミニズム 129

7 ニューファミリーの思秋期

- それからの団塊 134 ニューファミリーの神話 135 友達夫婦というけれど 138 つか
 のまの近代家族 142 自立と思秋期 147 主婦役割からの脱出 150 ハナコ世代以降
 152

133

8 親はだめになったか

- 家族危機論を疑う 158 三歳神話は本当か 161 母性剥奪と母子癒着 164 育児不安に
 なる条件 169 育児ネットワークの再編成 174 子どもを産む意味 178

157

9 双系化と家のゆくえ

- 第三世代の家族形成 184 頭打ちになった核家族化 186 跡取り娘の悲劇 188 養子と
 夫婦別姓 190 双系化とは何か 192 同居・別居・近居 196 高齢化とネットワーク
 199 家事労働力不足の時代 203

183

10 個人を単位とする社会へ

- 新しい男の出現 210 第二次人口転換 212 家族の時代の終わり 218 個人を単位とす
 る社会 223 弱者の家族からの解放 226 「個人を単位とする社会」と主婦 228

209

11 家族の戦後体制は終わったか

四半世紀が過ぎて 236 女性の脱主婦化 238 女性の非正規雇用 241 再生産平等主義

の崩壊 246 「家」の終焉 249 深刻化する孤立育児 255

12 二〇世紀システムを超えて

二〇世紀システムの転換と日本 260 制度改革とその効果 264 家族からの逃走 267

繁栄の中をつまずき 270 縮んだ戦後体制 274 二〇世紀システム以後の世界 277

エピソード 二一世紀家族へ

一九九〇年代 285 二〇〇〇年代 287 二〇一〇年代 290

注 295

カバール・本文エッチングⅡ栗岡奈美恵

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

プロローグ

20世紀家族からの出発



◆ 「戦後」へのカーテンコール

一九九〇年の春、わたしは東京は八幡山の自宅壮一文庫にこもり、くる日もくる日も古い雑誌をめくっては、その中に現れる女性のビジュアルなイメージの変遷を調べていました。今は懐かしいようなミニスカート姿あり、大女優たちの可憐な娘時代あり。そんなことをしているうち、わたしはおもしろいことに気がつきました。

女性たちの微笑みかたにも、流行りすたりというか、時代があるようなのです。敗戦後二、三年の女性像は笑みを取り戻してはいるけれど、うつむき加減ではにかむようにしか笑わない。一九五〇年になると女性たちは、はちきれりするような笑顔で、そろって空を仰ぐ。その後、年々、と言ってもいいくらい規則的に女性たちは仰角を下げ、と同時に少しずつ表情にかたさを加え、五五年には目線はほぼ水平になり、口元にいかにも作られた笑みを浮かべるばかりになってしまいます。たまたまそうした図柄が二点や三点あるというのではなく、雑誌の種類を変えてみても、イラストでも、グラビア写真の中の女優たちも、気味が悪くなるくらい同じ表情をしているのですから不思議です。

ところがさらに奇妙なことに、女性像の変化は一九五五年でおおむねストップします。六五年にも七五年にも、雑誌の中の女性たちは五五年とほとんど同じ顔で微笑み続けました。七〇年前後に、先進国に共通のいわゆる性革命の影響を受けて、未婚女性向けの雑誌を中心に大きな変化がありました。七五年までには特に主婦向け雑誌はほとんどどおりの様子に戻っていました。その後なので

す。再び変化に継ぐ変化の、いわば「イメージの実験」の時代が開始されたのは。^{*1}

「戦後」はしばしば急激な変化の時代として語られてきましたが、むしろ、ある一定期間安定した構造を保った時代として、いうなれば一つの社会体制として語ることができるのではないかと、そしてその前後の、いわば構造の出現と変容の時期と区別することができるのではないかと、という本書の着想がわたしの中に芽生えたのは、この小さな発見をしたときといつてよいでしょう。

この着想はさらに、もっとささいな日常的な観察によつても支持されているように思われました。ここしばらく、レトロだのリメイクだのといつて、一昔前の音楽やファッションがコマーションやら巷にあふれるという現象が続きましたが、時ならぬ脚光を浴びているのは、どうもやはり一定の時代のもののようなのです。ブームはたしか、ヨーロッパの「世紀末」あたりから始まりました。そして一九二〇年代、三〇年代を経て、やがて五〇年代、六〇年代ブームへ。日本でいえば、「サザエさん」や「ちびまる子ちゃん」人気に加えて、歌手山本リンダの復活もありました。そして、映画「ATL WAYS三丁目の夕日」（二〇〇五年）あたりからの「昭和」ブーム。

一般に懐かしいという感情は、ただ昔のものだからというだけでは起こりません。自分がどこかで見知ったものだから、今の自分に何かつながるところがあるから、人は懐かしいと感じるのです。かといって、今と根本的に変わらないのでは、ただ古びてつまらないだけ。いうなれば、今まさに失われかけているわたしの原点、という思いこそが、懐かしいという感情を喚起するのでしょうか。

そういう意味で、カーテンコールの拍手を浴びてきたのが、日本でいえば「戦後」という時代なの

です。家族という面に限ったことではありませんが、構造をもった一つの過去として「この時代」を振り返ろう、今ならそれができるといふ気になったのは、こんな「今」を肌身に感じているからかも知れません。

◇ 家族危機論をこえて

しかしただ過ぎゆくものへの後ろ向きの関心ばかりで、一冊の本を書き下ろそうといふ気になったわけではありません。家族が急激に変化しつつあるという認識が、政府、マスコミ、研究者から一般の人々にまで広がっています。出生率の低下や何やらは、日常的な話題になりました。家族はどこへ行くのか、二一世紀の家族はどうなるのか、こうした未来への問いにせひ今、答えを与えなくてはと、いふ思いをみんながつのらせています。

この変化を漠然と「家族の危機」と考えている人も多いようで、一九九〇年代初めころは「このごろの家族はだめになった」といふ印象をもっているかと尋ねると、大学のクラスでも社会人の集う場合でも、半数をはるかに超える手が挙がりました。しかしちょっと待ってください。こうした家族危機論の根拠はどのくらい確かなのでしょうか。

マスコミや世間一般の家族危機感を煽ってきたものに、経済企画庁国民生活局が発表してきた社会指標（一九七四～八四年）や国民生活指標（一九八六～九〇年）がありました（一九九二～九九年は新国民生活指標〔PLI〕、二〇〇二～〇五年は暮らしの改革指標〔LRI〕）。国民生活を「経済的安定」「環境と安全」

「健康」「勤労生活」などといった八つの生活領域に分け、それぞれについてのプラス指標とマイナス指標の動向を総合して各領域の状態を評価してきたのですが、これによると、一九七五年以来、ほとんどの領域が向上の一途をたどってきたなか、唯一「家庭生活」だけは大幅な悪化を示したということになっていました。特に八三年までの低下が深刻で、プレス発表を受けたマスコミ各社は毎年毎年、家族の危機と書き立てました。

しかし用いられた指標を少し詳しく検討すると、おかしなことに気がつきます。家庭領域の悪化に大きく影響したマイナス指標の少年非行発生率や小中学校の長期欠席児童・生徒割合は、家族の状態だけを反映しているとはいえません。独居老人数もマイナス指標とされていましたが、人口学的理由で避けられない部分もありますし、一人暮らしのほうが気ままでもいいといったケースもあるでしょう。しかもその独居老人数という指標を国際比較にも用いたことで、成人した娘・息子は原則的に親と別居する慣習の欧米の家庭生活が低く評価され、日本の家族は危機にあるが欧米に比べればまだまだ健全であるなどという、見当違いの「常識」がまかりとおることになってしまいました。国民生活指標は一九九二年から大幅改訂され、従来の八領域を用いないことになりましたが、筆者も一員であった改訂委員会のねらいの一つは、このような家族についての誤解を避けることにあったのです。

振り返ってみると、家族についての漠然とした危機感は、確かなデータにもとづいてというより、人々の意識の底に沈み込んだ気分のように、戦後を通じて存在してきたということがわかります。同じく官庁の資料、たとえば『厚生白書』では、一九五〇年代後半から六〇年代の初めにかけて、戦災

孤児や母子家庭など戦争に起因する問題と並んで、家制度の「解体」から生じる戦後家族の弱さの指摘が見られます。政府のみならず一般の人々も、夫婦関係などについては「家からの解放」を歓迎する一方、親子関係については、かの小津安二郎監督の「東京物語」など一連の映画に描かれているように、漠然とした不安を覚えないわけではなかったようです。

「核家族化」が進んだといわれる高度経済成長たけなわの時期になると、家族制度復活うんぬんが表立って主張されることはなくなりましたが、そのかわり核家族の脆弱性や、経済成長による歪みを指摘する論調が強くなりました。こうした、いわば資本主義批判に、「家制度の残滓」という封建遺制批判を折衷するのが、当時もつともポピュラーな家族論でした。

さらに一九七〇年代になると、「家族解体」とか「家族崩壊」とかいう表現が、家族問題を論じるときの決まり文句になってきました。もはや「家」などといったある特殊な家族類型ではなく、あらゆる意味での家族というものが危機にあるというのです。大平正芳内閣が「家庭基盤の充実」を一つの政策課題として掲げ、その流れを受けて家族問題を特集した『国民生活白書（昭和五八年版）』、通称「家族白書」がまとめられ、さきほどの国民生活指標が家庭生活領域の悪化を警告し続けたのも、このころのことです。

戦後を通じて「家族の危機」という言説がこれほど好まれてきた理由は何か、と問いを立てれば、それはそれで興味深い思想的なテーマではありませんが、家族自体に関心があり、確かな議論のための手がかりをつかみたいと思う者にとって、この状況はけっして歓迎できるものではありません。

「家の解体」から「家族解体」へと、家族はどんどん壊れて衰弱しつつあるという人々の気分は漫然と連続してきたものの、原因論は互いにひどく矛盾しています。そのどれが真実を突いていたのか、いや、そもそも家族は本当に危機にあるのか、病的な変化とそうでない変化とはどのように区別できるのか、などといった基本的な理解についての議論は、意外なほど手薄だったように思えます。

真に「危機」から脱出する手がかりを得るためには、いったん現象を思いきり突き放して、遠くから見つめ直してみる作業が不可欠だとわたしは信じます。「危機」とか「病理」とかいうときの、わたしたちの判断の根拠を逆に問い直すというような作業も含めて。必要なのは扇情的な家族危機論ではなく、冷静な家族変動論なのです。そしてその出発点はわたしたちの身近な過去を見つめ直すこと。一見迂遠なようですが、今わたしたちはどこへ行くこうとしているのかを知るためには、これまでわたしたちはどこにいたのかを正確に知っておかねばなりません。「二一世紀家族」を見通すためには、「二〇世紀家族」とは何だったのかを明晰に認識しておかなければならないのです。

◆ 本書の構成

というわけで、「二一世紀家族へ」というタイトルを掲げたこの本のテーマは、一見逆説的ではありますが、社会学の用語を使えば、戦後日本の家族変動論ということになります。とはいえ、戦後の家族の変化をただ歴史的に振り返ってみようというわけではありません。過去の理解を未来への展望として投射できるような、骨格のはっきりした理論的把握を試みたいのです。

章の順序はおおまかには時代の流れに沿っていますが、それだけではありません。本書では「家族の戦後体制」という考えかたを提案します。さきほど、戦後のある一定期間、比較的安定した構造を保った時代が存在したと思われるといいましたが、その時代の家族のありかたをこう名づけてみることにしたのです。わたしは「家族の戦後体制」には三つの特徴があると考えています。その成り立ちを最初の四つの章でスケッチして、次の第5章であらためてそれらを中間総括します。そしてそれ以降の章では、いったん成立した「家族の戦後体制」が今度は変容に向かっていく時代を取り扱い、その過程で生じ、いわゆる「家族危機」の現れとみなされているいくつかの「家族問題」を、三つの特徴との関連でとらえ直してみたいと思います。そして第10章では家族が向かっていく方向を可能な限り展望し、第11章と第12章では初版出版から四半世紀たった二一世紀初めの日本家族の現状を本書の理論的枠組みを用いて検討します。

本書の理論的な軸になっているのは、家族の社会史的研究から生まれてきた近代家族論という考えかたです。やはり社会史の基礎となっている歴史人口学の理論にも多くを負っています。また、読み始めていただければすぐにわかるように、女性学が培ってきたような「女の視点」も随所に感じられることと思います。この本はもちろん女性のためだけに書かれたのではなく、女子大で教職に従事してきた経験から、特にわたしより年下の女性たちが家族について考えるときの力になればと、いわば「妹たちへのメッセージ」となるよう心がけた部分もあります。

この本の構想は、「はじめに」でもふれたように、教室や講演会などさまざまな場でのさまざまな

方たちとのコミュニケーションの中で練り上げられてきました。個人的な相談事をもちかけてくださった方も少なくなく、わたしがみなさんからいただいた貴重なフィードバックは計り知れませんが、そうした双方向的な「ライブ感覚」をなんとか再現できないものかと、この本は思い切って会話調で書き下ろすことにしました。必ずしも教科書的な平易な解説をめざしたのではなく、むしろ通念とは異なる家族の見かたを提案しようとしている本書で、そうした文体を用いるのが正しかったのかどうかはわかりませんが、一章一章が一回完結の連続講座を聞くようなつもりになって、わたしの出すクイズの答えを考えたり、共感したり反発したりしながら楽しんでいただけたら幸いです。

著者紹介

落合 恵美子 (おちあい えみこ)

1958年 東京生まれ。

1980年 東京大学文学部卒業。

1987年 東京大学大学院社会学研究科博士課程満期退学。

兵庫県家庭問題研究所主任研究員，同志社女子大学専任講師，「人口史と社会構造史研究のためのケンブリッジ・グループ」客員研究員，国際日本文化研究センター助教授，京都大学文学研究科助教授を経て，

現在，京都大学大学院文学研究科教授。

著書 『変革の鍵としてのジェンダー』（共編著，ミネルヴァ書房，2015年），『徳川日本の家族と地域性』（編著，ミネルヴァ書房，2015年），『親密圏と公共圏の再編成』（編著，京都大学学術出版会，2013年），『アジア女性と親密性の労働』（共編著，京都大学学術出版会，2012年），『Asia's New Mothers』（共編著，Global Oriental，2008年），『近代家族とフェミニズム』（勁草書房，1989年）など

21世紀家族へ（第4版）

〈有斐閣選書〉

家族の戦後体制の見かた・超えかた

The Japanese Family System in Transition, 4th Edition

1994年4月5日 初版第1刷発行

1997年12月25日 新版第1刷発行

2004年4月10日 第3版第1刷発行

2019年10月15日 第4版第1刷発行

2021年5月30日 第4版第2刷発行



著者

落合 恵美子

発行者

江 草 貞 治

発行所

株式 有 斐 閣
会社

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町2-17

電話 (03) 3264-1315 [編集]

(03) 3265-6811 [営業]

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・大日本法令印刷株式会社／製本・大口製本印刷株式会社

©2019, Emiko Ochiai. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります

ISBN 978-4-641-28146-2

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に(一社)出版者著作権管理機構(電話03-5244-5088, FAX03-5244-5089, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。